

【研究ノート】

## 世界史教科書にみる中世とルネサンスの 記述について

—暗黒の中世とルネサンスの春と

小 野 昌

### 序

シェイクスピアはイギリスを代表するルネサンス期の劇作家ということになっており、それほどの歴史の教科書にも書いてあり、いわば「通説」になっているのであるが、それでは彼の作品の中で最もルネサンス的な作品は何かとなれば、それは『ハムレット』であるというのがこれも又「通説」と言えるでありましょう。そしてその主人公のハムレットこそ最もルネサンス的な人物と言えるでしょう。人間とは何か。生とは死とは何かと問いかけ、悩み続ける懐疑的なこの登場人物こそがイギリスのルネサンスを代表する人物なのである。シェイクスピアがここで描き出しているのはルネサンスのオプティミズムや人間の発見や世間の発見ではなく、暗いルネサンスの憂愁なのである。これこそシェイクスピアの作品の中でも最も暗く、重苦しい作品であるのです。ハムレットはウィッテンベルグの大学生ということになっているが、エリザベス朝時代のイギリス人がウィッテンベルグで連想することはマルチル・ルターの宗教改革の発祥地であるということでありましょう。ハムレットはルネサンスのペシミズムを代表する人物であると言えるのです。

これに対してシェイクスピアの底抜けの明るさや、楽しさを代表する登場人物達は『ヘンリー4世』のフォルスタッフであれ、『夏の夜の夢』の職人達であれ、みな中世的な意識の持ち主であると言えます。あるいは中世英文学を代表するチョーサーの『カンタベリー物語』の登場人物達であっても同じことが言えます。カンタベリーの大聖堂へ巡礼の旅に出かける彼等がいかに生き生きとして、「人間的」であることか。ですから英文学、特にルネサンスや中世文学を研究する者にとって、ルネサンスが明るい「人間開放」の春の時代で、中世が暗黒の冬の時代であるというようなイメージは全く無いのである。しかし一般的に日本ではこれはもはや「通説」となっているようである。それではこのようなステレオタイプな余りにも単純な見方は一体どこからきているのだろうか。

まず考えられるのが中学校や高等学校の歴史でこのように教えられているのではないかということである。そこで現行の高等学校の世界史教科書を十数種類調査し、さらに教授用資料や学習指導要領、中学校の歴史教科書、さらに一般読者向けの通俗歴史書など、様々な角度から検討してみた。その結果、興味ある事実がうかんできたのであるが、ここでは数多い高等学校世界史の教科書の中から特に山川出版社の『詳説世界史』をとりあげて具体的に検討してみたい。それはこれ1点だけで採用率が30%を越し、最も影響力の大きな教科書と考えられるからである。(以後、教科書からの引用は特にことわらない場合は『詳説世界史』とする)

## (1) 中世の文化の記述について

どの教科書にもさすがに中世を「暗黒時代」とであると決めつけるような記述は見られないが、暗黒と直接言わなくとも結果的にそのような印象を与える書き方が一般的である。『詳説世界史』の第Ⅰ部、第7章、ヨーロッパ世界の形成と発展、6項の西ヨーロッパの中世文化、「学問と大学」より引用してみよう。

西ヨーロッパ中世はキリスト教の時代である。教会の権威は絶大で、生活も文化も教会をはなれては存在できなかった。人口の大部分を占める農民は無学文盲で、聖職者は聖書の言葉であるラテン語を学術語として用いる学者・知識人であり、同時に科学者でもあった。美術・建築は教会とその装飾のために発達し、学問は神学を最高として、哲学や科学もこれにしたがった。そのため文化の地域差は少なく、学問の分化はなく、自由で合理的な研究という点では、ギリシア・ローマの古代より後退していた<sup>1)</sup>。(上点筆者)

一読して中世という時代がマイナスのイメージで捕えられていることがわかる。特にキリスト教に対するイメージが著しく悪いものとなっている。「農民は無学文盲で……」の記述は聖職者が学問を独占していたためという意味であろうか。しかし農民が文盲であったのは、必ずしもこの時代ばかりではないし、それをあたかも聖職者のせいにするのもどんなものであろうか。「そのため文化の地域差はなく……」のそのためとはどのためであるのかこの文脈では理解できない。この教科書は何度も版を重ねているにもかかわらず、このような不明瞭な記述が放置されているのはなぜなのであろう。同じ箇所を扱っている清水書院の教科書では「文化の基調」という項で次のように説明している。

封建社会の文化は、キリスト教を基調として展開された。学問はキリスト教神学が、美術は教会建築が中心であり、文学でもキリスト教の価値観が主流であった。当時、読み書きので

きるものは、ほとんど聖職者に限られていた。その言語はラテン語で、これはヨーロッパ共通語として使われたため、この時代の文化は、民族や国民をこえた普遍的・統一的な性格が強かった<sup>2)</sup>。

これが客観的な記述というものではないのだろうか。そしてなぜヨーロッパ中世という時代が文化の地域差が少なかったのかも理解できるのである。『詳説世界史』ではさらに神学の説明が続くが、これも誤解を生じ易い記述なので引用してみよう。

神と教会の権威の確立をめざす神学は、教父とくにアウグスティヌスの思想を基礎として、カール大帝時代に学僧アルクィンらにはじまった。その後アンセルムスの实在論をへて、十字軍時代にビザンティン帝国やイスラムから伝えられたギリシア哲学もとり入れて、12世紀ごろ壮大な体系のスコラ学に発展した。13世紀に「神学大全」を著したトマスアキナスがその大成者である<sup>3)</sup>。

この教科書の特徴として中世のキリスト教に対しては枕詞のように「権威」と結びつけるやり方がある。そしてスコラ学という中世を代表する学問の説明の冒頭が「神と教会の権威の確立をめざす神学」としたのでは、前提が正しくないために、すべてがおかしなものになってしまう。いかに教科書の記述が簡潔であることを要求されているにしても、すべてに「権威」を付けて事足りりとする安易な記述である。これではスコラ学が目ざしたものが何んであったかの説明には全くなっていない。これに比べて同じ教科書であっても清水書院の教科書の記述の方がほぼ同じ分量でありながら情報量も多く、よくわかる客観的な書き方となっている。

学問・教育に教会のはたした役割は大きかった。当時の最高の学問はキリスト教神学で、それはスコラ学として体系づけられた。

スコラ学とは、キリスト教の教義を学問的に論証しようとするものである。スコラ学はアウグスティヌスの思想をひきつぎ、アンセルムス・アペラールなどによって発展をみたのち、13世紀にトマスアキナスによって大成された。彼は『神学大全』を著し、信仰と理性の調和をはかろうとした<sup>4)</sup>。

合理的な思考方法をヨーロッパ世界にもたらしたという点において、スコラ学ほど大きな影響を与えたものは中世においてなかったと言っても過言ではない。そしてこのスコラ学はギリシア哲学の要素（カトリック的な立場からみれば異邦的な要素）をヨーロッパ中世文化がその知的な伝統の中にとり入れることには熱心であったかを示しており、中世キリスト教の持つダイナミ

ズムを示す好例であると考えられるのであるが、『詳説世界史』ではさらに続けて、

神学の権威のもとでは合理的な学問の発達はやまげられた。十字軍以降ギリシア・イスラムの哲学が流入しても、それは神学の補強に利用されただけで、哲学自体の発展はあまりみられなかった。自然科学も同様で、天文・医学ははなはだしくおとろえた。しかしイスラム科学の影響は13世紀以降しだいにあらわれ、“実験”を重視したロジャーベーコンは中世最大の自然科学者であった<sup>6)</sup>。

なるほど中世もその初期の時代に限って言うなら以上の説明もある程度あてはまるかもしれない。けれどもこれを1千年にわたる中世全体の文化に関して言うならば、明らかに正しいとは言えないであろう。そして科学という学問の停滞の原因を神学の「権威」にだけ求めるのもまた同じことが言える。なぜなら「イスラム文化もキリスト教文化と同様に宗教によって支配されていた文化であったから。またイスラム教神学はカトリック神学よりはるかに科学的思想を敬遠していたからである。」<sup>6)</sup>そしてヨーロッパの諸民族はラテン文化を取り入れることに急で、ギリシア的な科学の伝統を間接的にしか学ばなかったからである。これに対してイスラム文化はヘレニズムと直接関係を結ぶことによって、ギリシア科学の文献を直接学ぶことができたのである。つまり科学の停滞を問題にするなら、その原因はローマ人がギリシア人よりも科学の面では著しく劣っていたことに起因するのである。その遅れに気づいたヨーロッパの学者達は、12世紀から13世紀にかけて盛んにアラビアの科学書や、アリストテレスなどの古代ギリシアの著作を積極的にラテン語に翻訳し、ヨーロッパの科学的文化の基礎を作りあげることになるのである。

当然のことながらキリスト教の信仰とアリストテレスの科学的合理主義との間に摩擦が生じたのであるが、教皇自身新しい学問の重要性を認め、科学をとるか、信仰をとるかというような二者択一的な問題とはならなかったのである。

大学ができたことは学問の発達の見地から、中世の評価されるべき大きな功績の一つであると考えられるのであるが、そのような積極的な意義については触れず、

しかし大学は教皇や皇帝の特許状による一種の学問ギルドで、特権的自治はあったが、真の意味での学問の自由はなかった<sup>7)</sup>。

とするのはどんなものであろうか。大学はその成立の始まりからある程度の自治を認められていたことを特筆大書すべきなのであるまいか。「真の意味での学問の自由」など現代においても全くない国が数多く存在しているというのに800年近く前の出来ごとに、このようなコメントをつける必要があるのだろうか。これこそ現代を基準にして過去を裁断するという進歩主義史観の典

型的な表われとすることができる。

中世の最後は文学についての説明で次のようになっている。

文学は教会の制約から自由であった唯一のもので、騎士道物語を中心に、題材・表現ともに自由で人間的なものがあつた<sup>8)</sup>。

ここまで言いきるのならば、なぜ文学だけが教会の制約から自由であり得たのかに対する説明がなければならないのではないか。そうでなければ最初の記述、「教会の権威は絶大で、生活も文化も教会をはなれては存在できなかった。」と矛盾するのではないか。そして教会の制約から自由であったということが、キリスト教の影響がなかったという意味であるとしたら、これも全くの誤りであると言える。

騎士道物語が例として挙げてあるところをみると、教科書の執筆者は恐らくその中に中世の道徳律にそぐわない部分があるのでこのような記述となったのではないかと考えられる。確かに10世紀まで、騎士達の理想とするところとキリスト教的な道徳律とが対立する部分がかかりあつた。けれども11世紀になるとその対立は解消しはじめ、しだいに新しい宗教的色彩に豊んだ騎士道へと変化していくのである。そしてもし文学というものがその時代に生きた人間の姿を写す鏡であるのならば、それはとりもなおさず中世にも「自由で人間的なもの」があつたことを逆に証明していることになるのではあるまいか。

中世ほど人間の歴史において宗教と文化とが一体となっていた時代はなかつたであろう。それは教科書の記述の通りである。ならば文学のみがその例外であり得ようか。どの時代にもその時代を特徴づけている時代精神がある。さしずめ現代は自然科学や経済などであろうか。中世はそれがキリスト教という宗教であつたのである。中世の人々の最大の関心が宗教に向けられていたのである。それゆえ今日の我々日本人の目で、学問の自由がなかつたとか、合理的、理性的でないなどと言ってもそれは意味のあることではない。「哲学は神学の婢」という教科書の引用も次のように解されるべきだろう。

「哲学は神学の婢なり」という言葉は中世における理性の敗北を表現したものではなく、神学はすべての学問の総合的体系として完成させるために、個々の学問をこれに参与せしめることを意味していた。近世科学の祖といわれるロージャー・ベイコンの“一切の知識は啓示に基づき神学に役立つ”という言葉と同様の意味をもっていた。従がって中世文化の理解はこの総合体系の中核に向けられるべきである<sup>9)</sup>。

世俗化した現代人の目で価値体系の異なる中世をながめ、いたずらにその文化をいやしめている

態度がこの教科書には見られる。それとも後に続くルネサンスその対照をきわだたせるために、意図的になされているのであろうか。1千年の長きにわたってヨーロッパの多くの国の人々が宗教の権威に抑圧され続け、人間らしく生きることが許されなかったなどと考えることがいかに非常識であり、それこそ非人間的ではないだろうか。

## (2) ルネサンス

まず時代区分のしかたであるが、『詳説日本史』ではルネサンスは「近代ヨーロッパの誕生」の章の入っている。そしてこの章は、1.ルネサンスと人文主義、2.ヨーロッパ世界の拡大、3.宗教改革、となっており、この3項目をセットにして近代の始まりと見ていることがわかる。中世という時代を古代と近代とにはさまれた「暗黒」の時代として、いわば意図的に貶めた時代区分を作りだしたプロテスタントの歴史家、クリストフ・ケラリウスの『中世史』(1698)の時代区分をほとんどの教科書がそのまま用いている。(例外は清水書院の教科書で、他の教科書の中世と近代の部分を「ヨーロッパ世界の形成と発展」という項目で一括して扱っている)ルネサンスを近代の始まりとするこの時代区分のしかたには、すでにある価値判断がなされているのである。従ってその価値観に基づいてルネサンスの概説がされているのであるが、少し長いが重要な部分であるので引用してみたい。

中世末期にめざましく発達したヨーロッパの諸都市には、封建社会の殻を破ろうとする自由な空気があふれ、そのなかから人間精神の全般的な革新をめざす大きな文化運動がおこってきた。これが“ルネサンス”(“再生”の意味)であり、その時期は14世紀から16世紀にわたっている。

ルネサンスはまずイタリアにおこり、やがてアルプスの北方にもひろまったが、その新しい文芸や思想を導いた根本精神を人文主義あるいは人間主義(ヒューマニズム)とよぶ。

人文主義は、ほんらい、中世カトリック教会の権威のもとで長らく忘れ去られていた、ギリシア・ローマの古典文化の価値を再発見し、古典の復興と研究をつうじて人間の品性を高めようとする動きをさす。しかしそこには、より広く、人間本体の立場から自分の目でものをみ、何ものにもとらわれない心でものを考えようという要求がふくまれていた。宗教は否定しないが現世の生活を楽しみ、個性の発揮をもとめるこの気運のなかから、多くの天才があらわれ、かずかずのすぐれた文芸作品が生まれた<sup>10)</sup>。

一読してブルクハルト流の近代的な、かなり理想化されたルネサンス像であることがわかる。このように中世とルネサンスに対して余りにも強いコントラストを与える見方に対して、20世紀に

入るとすぐに数々の批判がなされてきており、特に第2次世界大戦以後の中世研究の発展によって、もはやこのような理想主義的、あるいは啓蒙主義的な見方が通用しなくなっているにもかかわらず、120年前に書かれた歴史書の説をそのまま、というより大胆に単純化した形でほとんどすべての教科書が採用しているのはどういう理由によるものであろうか。高等学校の歴史の教科書に最新の歴史学の研究の成果を載せる必要は無いのは当然であるが、1世紀近くも遅れているのも考えものである。

誤解を招き易い箇所がいくつかある。例えば、「カトリック教会の権威のもとで長らく忘れ去られていた、ギリシア・ローマの古典文化」であるが、忘れ去られていたどころか、中世の修道院こそ、古典の写本の宝庫であることを最もよく知っていたのが当のヒューマニスト達であったであろう。ただ違っていたのは中世の人々も古代文化の偉大さは認めてはいたのだが（そうでなければ写本などしなかったであろう）、それを模範と仰いだりしなかつただけである。さらに教科書では「エラスムスは、16世紀最大の人文主義者として国際的に活躍し、『愚神礼讃』で教会の腐敗を攻撃した」<sup>11)</sup>と説明しているのだが、この最大の人文主義者は「宗教は否定しないが…」どころではなく、カトリックの聖職者であり、ルターの宗教改革には反対であったことなどには一切触れずに、ただ「教会の腐敗を攻撃した」と書くだけでは余りにも一面的であると言わざるを得ないであろう。

どの教科書にもレオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロ、あるいはボッティチェリの作品が載せられて、いかにもルネサンスの文化が世俗的であり、人間の開放を讃美しているかのような印象を与えているのであるが、ミケランジェロの『ダヴィデの像』にしても、彼にとって神はあらゆる美の源泉であり、神の似像としての人物像なのであり、ボッティチェリの『ヴィーナスの誕生』にしても、『春』にしても、「前者は『母なる』、後者は『天の』アプロディテを描く。これら異教の愛の女神が聖母と相似することに新プラント派の教祖の具象が見られる」<sup>12)</sup>のである。

本論の主旨とは直接には関係はないが、不適切と思われる記述がいくつかある。中世末になってもイタリアは政治的にはまったく無統一で、……」(p. 163) (上点筆者)である。現代からみれば中世末期かもしれないが、当時のイタリア人にとっては、それはあくまで現代なのであり、不必要な記述であろう。さらに、「イタリアルネサンスの文化は……貴族的な性格をおびることになった。そのため人文主義者たちが、古い権威や聖職者の墮落を風刺しても、現存の社会組織や政治体制それ自体の改革をとらえろにはいたらなかった。」(p. 165)などである。ルネサンスのいわゆる「解放」が社会の根本的な変革を実現するものではなかったこと、つまりルネサンスの限界を示すつもりであるのだろうが、これも歴史を社会変革のプロセスとみる史観からみた限界でしかなく、こんなところにも進歩史観が反映しているといえよう。

### (3) ルネサンスの科学

ルネサンスの時代には自然の観察や実験が重んじられ、科学や技術がいちじるしく進歩し……<sup>13)</sup>

教会の教えにとらわれず自由な目で宇宙を観察する新しい風潮は、中世のあいだおとろえていた科学精神をよびさました<sup>14)</sup>。

このように教科書にはこの時代に科学の発達が著しかったような印象を与えるような書き方がしてある。しかし特にルネサンスの時代が中世の後半よりも科学史において目ざましいものがあったとする事実はない。いわゆるルネサンスの三大発明（火砲・羅針盤・活版印刷術）なる物も、この時代のオリジナルな発明ではない。「教会の教えにとらわれず自由な目で」見るはずである人文主義者達は自然科学の発達に寄与するどころか損害を与えているとブルクハルトは記している。そして彼は教会は「これら、およびその他のにせ物の科学に対して、ほとんどつねに寛容であった。そして真の自然研究に対しても……同時に異端や巫術をもとりたてる時でなければ、教会は乗り出してこなかった」<sup>15)</sup>と記している。人文主義者の説明を読めば当然我々は彼等が自然科学を推進する力になったという印象を与えられるのだが、事実は逆で反科学的であったのである。このようにルネサンスという現象は極めて複雑な要素を持っており、中世の教会の束縛＝科学の停滞、宗教からの解放＝科学の進歩という余りに単純化された図式がここでも破綻をきたしていることがわかるのである。

### (4) 宗教改革と反宗教改革

この項の記述も極めて単純に図式化される。一貫している考え方は「改革」は善であるとする思想である。まずルターの宗教改革について、

この運動は、自由をもとめる市民階級の願望や、教皇の支配からのがれようとする人びとの国民的自覚などとむすびついて、ドイツ以外にもひろがり、その影響は政治や社会・経済にまでおよんだ<sup>16)</sup>。

これに対してカトリック側の記述は贖宥状（免罪符）の説明と贖宥状売りの姿が図入りで示され、『「お金が箱に投げられる音とともに霊は煉獄から救われる』と説いた」という解説が付く。



これに対してマルティン・ルターは、

魂の救済は善行によらずただ福音の信仰のみによるとの確信から、贖宥状の悪弊を攻撃する“九十五ヶ条の論題”を発表した。……教皇庁の搾取にいきどおる諸侯，自由をもとめる市民階級，封建制の重圧に苦しむ農民などが，ルターのよびかけにこたえてかれを支持した。<sup>17)</sup>

「魂の救済は善行によらずただ福音の信仰のみによる」などと説明されても，キリスト教の知識のない一般の高校生には何んのことなのか理解されるはずもなく，要するに悪いカトリック側に対して，正義の味方ルターと，搾作されていた諸侯や，自由を求める市民，苦しむ農民が立ち上がった，ということになるのである。それに対して教皇や皇帝が圧力をかけてくる。

しかしルターは信念を曲げず，そのため，法律の保護外におかれたが，主君であるザクセン選帝侯の保護下に聖書のドイツ語訳修道院の廃止その他の改革運動をおしすすめていった<sup>18)</sup>。

カトリック側からみれば「修道院の廃止」どころではなく徹底的な破壊などであるが，記述は「改革」側の見方で書かれている。そしてこの改革をカルビンがさらに推進することになる。

かれは教会組織の面ではルターより一步すすんだ改革をおこない，司教制を廃して信徒の代表である長老の制度を設けた<sup>19)</sup>。

なにしろ，改革は善なのであるから，この記述を読む限りにおいてはカルヴィンの改革によって，国民の宗教に対する自由度は増し，異端審問などのない社会が実現したかのような印象を受ける。カルヴィンがジュネーブで行なった神政政治がどんなに厳しいもので，反対者に対して肅正に肅正を重ねたかなどの記述は全くみあたらないからである。

カトリック教会側の改革（反宗教改革）に対しては次のように書かれている。

宗教改革に直面してカトリック教会も反省の必要を認め，信仰の革新をつうじて勢力を立て直そうとつとめた<sup>20)</sup>。

こんなところで価値判断の入る「反省」などという表現を使えば，悪かったのはカトリック教会の側であると自から認めているような印象を与えてしまう。そしてさらに、

しかしこの反宗教改革運動は、16～17世紀の西ヨーロッパ各地で新旧両教徒の対立をさらに激化させ、激しい宗教戦争をひきおこした<sup>21)</sup>。

これでは宗教戦争などが起きた原因はカトリック側が反宗教改革などをしたからだということになり、極めて公平を欠いた記述となっている。宗教のような、立場が違えば全く逆の判断のできるような史実を、ある一方だけの見方によって記述してゆくやり方が、この教科書には余りにも露骨に示されている。

## 結 論

暗黒の中世とルネサンスの春というイメージの源泉を求めて調査した高等学校の世界史教科書の記述から、筆者の予想もしていなかった様々な事実が浮かび上ってきた。まずこのようなイメージを作り上げる記述が確かに教科書の中にあること、そしてそのイメージを作る上で中心的な役割を演じているものがキリスト教、特にカトリックに対する考え方であることがわかるのである。

中世に対する暗さの原因とされているのはカトリック教会そのものである。要約すれば、中世はキリスト教の時代で、教会の権威は絶大で人々は教会を離れては生活できず、大部分の人達は学文盲で、聖職者が学問を独占しており、その学問も神と教会の権威の確立をめざす神学中心であった。神学の権威のもとでは合理的な学問は発達せず、大学はできたが真の学問の自由はなく、大学のみが教会の制約から自由であった。

このような「俗説」が中世研究が進むにつれていかに誤った見方であるかが明らかになってきたかはすでに本論で述べた。そしてルネサンスの春のイメージはこの中世を暗くしているカトリック的要素を否定してゆくことによって達成されるのである。すなわちルネサンスの時代になると、人々はカトリック教会の権威を否定し、教会の権威のもとで忘れ去られていた古典文化を模範とし、宗教にとらわれない自由な生き方を求め、そのような態度から科学が発達し、地理上の発見が行なわれ、墮落したカトリック教会に対してルターやカルヴィンによって宗教改革が行なわれた。そしてここに近代ヨーロッパが誕生するという図式である。そこに楽天的なルネサンスがあるだけで、ルネサンスの持つ憂愁のかけらも見られないのである。

なるほどこのような図式は極めて単純なために、説明もし易いし、理解も容易であり、教える側にとっても学ぶ側にとっても理想的な図式ではある、ただ誤りであるという点を除けば。さらに文化史の面だけでなく、社会経済史的に見ても誤りであることを森田鉄郎教授は指摘しておられる。

私は、ルネサンス文化が啓蒙文化に対してよりは、いわゆる中世文化に対して、より近親性を持つことを主張するシャポーに組みしたい。そして西欧はともかくイタリアに関する限りは、ルネサンス期の経済が近代資本主義の直接的形成過程に対応する近代的繁栄と原理的に異質のものであることを明確に認識すべきだと思う<sup>22)</sup>。

長い中世時代を通じて、ヨーロッパの精神的、文化的な発展に大いに寄与してきたキリスト教という宗教を理解しようともせず、単に「権威」、「腐敗」、「墮落」のレッテルを貼ってかたづけ、その権威の否定に進歩を見いだしているような書き方の背後に、宗教というものが、「理性の否定において成立する」<sup>23)</sup>とする考え方があるのではないだろうか。理由はともかく、特定の史観で歴史を裁断したり、あるシナリオに合わせて歴史を見ることなく、もう少し情緒的でない学問的な記述が教科書に望まれる。そうでないと、我々日本人の西洋に対する理解は一步も進まないからである。

(この研究ノートは1984年9月、ルネサンス研究所総会のシンポジウムでの発表に加筆したものである)

#### 注

- 1) 村川堅太郎・江上波夫・山本達郎・林健太郎『詳説世界史(新版)』(東京, 山川出版社, 1983年), p. 153.
- 2) 池田温ほか12名『高等学校世界史』(東京, 清水書院, 1984年), p. 109.
- 3) 『詳説世界史』p. 153.
- 4) 『高等学校世界史』p. 110.
- 5) 『詳説世界史』pp. 153—154.
- 6) クリストファー・ドウソン著, 野口啓祐訳『中世のキリスト教と文化』(東京, 新泉社, 1969年), pp. 85—86.
- 7) 『詳説世界史』p. 154.
- 8) Ibid., p. 155.
- 9) 橋口倫介「中世文化」, 吉岡力編 東大教養西洋史1『ヨーロッパの成立』(東京, 創元新社, 1964年), p. 197.
- 10) 『詳説世界史』p. 162.
- 11) Ibid., p. 166.
- 12) 中森義宗「美術家像—三巨匠をめぐる—」, 中森義宗・岩重政敏編『ルネサンスの人間像』(東京, 近藤出版社, 1981年), p. 40.
- 13) 中屋健一・松俊一・栗原純『三省堂世界史』(東京, 三省堂, 1984年), p. 162.
- 14) 『詳説世界史』p. 166.
- 15) ヤーコブ・ブルクハルト著, 柴田治三郎訳『イタリア・ルネサンスの文化』, 世界の名著45(東京, 中央公論社, 1966年), p. 334.
- 16) 『詳説世界史』p. 171.
- 17) Ibid., p. 172.

- 18) Ibid.
- 19) Ibid., p. 173.
- 20) Ibid., p. 175.
- 21) Ibid.
- 22) 森田鉄郎「社会経済史的に見たイタリアルネサンス時代づけ(二)」『史学雑誌』, 第72編, 第2号(1963年), p. 91.
- 23) 会田雄次『ルネサンス——新書西洋史④』(東京, 講談社, 1973年), p. 166.